

フィクション劇場 第四話「公人と私人」



フィクション劇場
「公人と私人」
第四話

大太
大

【はじめに】

○「フィクション劇場」作者の大太 大（お
おた・だい）と申します。つたない作品
にご興味を持って頂き、ありがとうございます
います。

【フィクション劇場とは】

○作者が世の中で違和感を感じている事や疑
問に思っていることなどに対して、「も
し、こういう設定や条件になったら、当
事者たちはどう動くのか」を考えたオム
ニバスドラマです。フィルム・バイヤー
さんではドラマ部門に全二十五話をまと
めて公開しており、それと同様に完全著
作権フリーですので、詳細はそちらをご
覧下さい。マスメディアに少々風が向い
ている「性根の曲がった社会派ドラマ」
で、この第四話はその中から、芸能人関
係を題材にした作品をセレクトした話と
なります。では本編をどうぞ。

フィクション劇場 第四話「公人と私人」

【登場人物】

羽山 輝樹（はやま・てるき）（57）：大物俳優。愛称は「テル」

羽山 京子（はやま・きょうこ）（声のみ）（53）：輝樹の妻。一般女性。

（JBA…Japan Broadcasting Association 大河ドラマ「老松」制作スタッフ）

木嶋（きじま）（28）：アシスタントディレクター

小林（こばやし）（36）：ディレクター

佐藤（さとう）（45）：総合プロデューサー

（大日本テレビ…委託制作会社）

加藤（かとう）（40）：ディレクター

村上（むらかみ）（35）：社員

下村（しもむら）（32）：社員

大森（おおもり）（31）：社員

フィクション劇場 第四話「公人と私人」

(アルプステレビ)

山口 弘 (やまぐち・ひろし) (54) …アル

プルテレビ 報道局長

平井 武 (ひらい・たけし) (52) …同 制

作局長

藤川 誠 (ふじかわ・まこと) (50) …同 コ

ンテント部部長

(JBA TV討論会参加者)

牛山 加奈子 (うしやま・かなこ) (33) …

JBA討論会司会者

高橋 修二 (たかはし・しゅうじ) (56) …

JBA報道局次長

長谷川 芳輝 (はせがわ・よしてる) (48) …

…アルプステレビ記者

多良 伴内 (たら・ばんない) (45) …SB

S (首都圏テレビ) 記者

三上 さおり (みかみ・さおり) (43) …大

日本テレビ記者

フィクション劇場 第四話「公人と私人」

植村 直之（うえむら・なおゆき）（45）
：
毎朝テレビ記者

フィクション劇場 第四話「公人と私人」

【あらすじ】

国营放送JBA・民放を問わず多くのテレビドラマに出演している大物俳優・羽山輝樹は、プライベートに踏み込むことを嫌う。

しかし、JBA大河ドラマ撮影中に、大日本テレビの制作会社はそのタブーを破ったことに憤慨。大河ドラマの総合プロデューサー佐藤に、自分が薬物を使っていると騙し、現在の大河ドラマ降板だけでなく、民放を含む過去の全ての出演作品がお蔵入りになると脅す。そして、JBAと民放キー局4社で「公人と私人」をテーマにした討論会の開催を強要する。各社の報道局長に参加要請したが、結局、各々の記者が出席。羽山はオプザーバー参加した。

各記者は全員一個人の意見として、この話題について発言するが、羽山は、結局のところ取材したいがために都合よく公人に行っている、との意見を述べ、記者たちに討論会に、どういう立場で出席しているのか問う。

フィクション劇場 第四話「公人と私人」

○JBA大河ドラマ「老松」収録現場（昼）

ステジオの入り口の扉に、「JBA大河ドラマ『老松』」の張り紙がある。

佐藤「OK！ 次、カメラ変えるので、キャストの方は小休止して下さい」

羽山輝樹は椅子に座る。

ADの木嶋がペットボトルの水を羽山に差し出す。

木嶋「羽山さん、お疲れさまです。どうぞ」

輝樹「ああ、ありがとう」

輝樹はペットボトルの水を飲んで、足を組む。

ディレクターの小林が羽山に近寄りながら、

小林「羽山さん、どうですか？」

輝樹「『羽山』って堅苦しい呼び方はやめてくれって言ってるだろ？ 『テル』でいいよ」

小林「すいません。…じゃあテルさん、調子はどうですか？」

輝樹「いいですよ。でも、今回の『老松』は

フィクション劇場 第四話「公人と私人」

古い歴史上の人物と違って、ご存じの方が
多いからね。そういう意味で緊張感がある。
志ん朝師匠の噺は一級品でしたし」

小林「そうですね。戦国物や時代劇はそれな
りの数字が見込めますが、今回は、こちら
も冒険していますんで」

輝樹「じゃあ、数字が取れなくても、私のせ
いじゃあないってことでいいんだよな？」

小林「それは、勘弁して下さい」

輝樹・小林「ははは」

輝樹「でも、まあ、とにかくセリフが…、と
いうか、噺を覚えるのが大変で」

小林「寄席のシーンが多いですからね。これ
でもカメラの切り替えを細かくして、テル
さんの負担を減らすようにしてはいるので
すが…」

輝樹「別にイヤだと言ってる訳じゃないんだ
よ。こうやって実際にやってみると、噺家
の方は本当に凄いなあと」

小林「どの辺が、そう思いますか？」

フィクション劇場 第四話「公人と私人」

輝樹「舞台だと何かあれば周りの出演者が助けてくれるが、落語は一人だからね。一人芝居も何度か演ったことはあるが、基本的に落語は座って、声と座りながらの動きしかないだろう？ だから起伏が付けにくい。それに、一人で何役もこなさないといけないし」

小林「同じ演目を演っても、個性が出ますしね」

輝樹「ああ。CDを買って勉強はしていたんだが、その所作というか、そういうのが足りないと思ったので、そちらからVTRを借りして」

小林「こちらでお手伝いできることは何でもしますから、遠慮なくおっしゃって下さい」

輝樹「ありがとう」

輝樹はペットボトルの水を飲む。

輝樹「しかし、今回の脚本家の方がうらやましいよ」

小林「なぜですか？」

フィクション劇場 第四話「公人と私人」

輝樹「嘶の部分は枕を考えて、後は『二番煎じのここからここまで5分』とかでしょ？」

小林「いやいや、テルさん。師匠は枕だけでもお金の取れる方でしたから。実際使った枕にするか、新しく考えるかで大変みたいですよ。下手なことはできませんからね」

輝樹「そうだね」

小林「確かに書く量は少なくなるかも知れませんが、どの場面にもどの嘶を持ってくるかってのは考えないといけませんから。テルさん同様、嘶は全部聞いているみたいです」

輝樹「そりゃ良かった。とにかく一生懸命やりますよ」

小林「よろしくお願いします。行き詰まっても深酒とかはやめて下さいね。そこはマネしなくてもいいですから」

輝樹・小林「ははは」

小林「ところで、テルさん。最近、奥様のために家を買ったと聞いていますが…」

輝樹の表情は豹変。

組んだ足を解き、語気を強める。

輝樹「その話、どこで聞いた？」

小林「い、いや、風の噂っていいいますか？」

輝樹「どこの風だ？」

輝樹の怒りの表情と小林の固まった様子
子を佐藤が見る。

秀困気が悪いのを察して、二人に近寄
る。

佐藤「テルさん、どうかしたんですか？」

輝樹「…こいつが、妻の話をした」

佐藤は青ざめる。

佐藤「す、すいません！ こいつには私から
きちんと言っておきますから」

佐藤は小林の腕を引っ張って連れてい
く。

佐藤は小林の腕を引っ張って下げて、
自分の顔を近づける。

佐藤は、ちらっと羽山の方を見る。

お互い小声で、

佐藤「おまえ、テルさんに何を話した？」

フィクション劇場 第四話「公人と私人」

小林「い、いや、奥さんのために家を建てたみたいですね、としか言っていないませんが…」

佐藤「バカ！ 知らないのか？ テルさんはそういうのが一番嫌いなんだ」

小林「プライベートの話が、ということですか？」

佐藤「そうだ。テルさんの奥さんは一般人の方なんだが、付き合っていた時に散々メディアに追い回されていたんだ。それに結婚してから、テルさんの仕事がうまく行かなかった時も支えてくれてたって話だ。だから、テルさんはプライベートに触れるのを、極端に嫌う」

小林「そういう話は聞いていましたが…、そこまでとは思ってなかったです。すいません…」

佐藤「テルさんにはオレから詫びを入れておくから、二度とその話はするなよ」

小林「分かりました。気を付けます」

佐藤は輝樹のところに小走りに向かっ

フィクション劇場 第四話「公人と私人」

て、頭を下げている。

○輝樹の自宅（その日…夜）

輝樹が妻の羽山京子に電話をかける。

輝樹「もしもし、京子か？」

京子（声）「はい」

輝樹「今、帰ったよ」

京子（声）「お疲れ様でした」

輝樹「そっちの生活には慣れたか？」

京子（声）「安心して下さい。大丈夫ですよ」

輝樹「それは良かった」

京子（声）「でも輝樹さん。こういう離れ離れ

の生活はいつまで続くのですか？」

輝樹「辛抱してくれ、もう少しだ」

京子（声）「何か当てがあるの？」

輝樹「実は、大手配信サイトから海外を中心

に活動してみないか？ っていう話が来て

るんだ」

京子（声）「そうなの」

輝樹「ああ。最近、日本のドラマの評価が高

フィクション劇場 第四話「公人と私人」

くなってるな。ギャラもいい。それがうまく行けば二人揃って、海外で生活できる。メディアの連中もそこまでは追ってこないだろう」

京子（声）「それはうれしいけど……。でも無理しないでね」

輝樹「大丈夫だ」

輝樹「……ところで、そっちで何か変わったことはなかったか？」

京子（声）「特にはないけど……。どうかしたの？」

輝樹「いや、今日、現場で京子の家を建てたことを知ってるヤツが居たんだ。風の噂とか言ってたから、出所はよく分からないんだが……」

京子（声）「そうなの？ この辺は閑静な住宅街だから、変な車とかが止まっていたらすぐに分かるけど……」

輝樹「とりあえず注意してくれ。お手伝いさんに、買い物とかをお願いして、なるべく外に出ないように頼む。用心するのに越し

フィクション劇場 第四話「公人と私人」

たことはない」

京子（声）「輝樹さん、何もそこまでしなくても、私は…」

輝樹「いや、ダメだ。もう結婚前のような思いをさせたくない。すまないが我慢してくれ」

京子（声）「…分かったわ」

○大日本テレビの委託制作会社 会議室（昼）

村上、下村、大森の3人の社員が居る打ち合わせ部屋にディレクターの加藤が浮かない顔で入ってくる。

加藤「それじゃ、打ち合わせ始めるぞ」

村上「加藤さん、浮かない顔ですね。うちのコーナ―の数字ですか？」

加藤「ああ、そうだ。帯コーナ―の中で最低だ。プロジューサーから、お前んとこのコーナ―はトイレタイムだ、って言われたよ」
下村「トイレならCM中に行ってくれればいいのに…」

フィクション劇場 第四話「公人と私人」

加藤「バカ！ そんなこと言ったら、一発で干されるぞ」

大森「：で、プロジューサーから何か指示があっただんですか？」

加藤「指示も何も、とにかく数字が上がるモノを作れ、それだけだ。次のクールもダメだったらヨソに頼むって真顔で言われたよ」

大森「じゃあ、かなり食いつきのいい企画を考えないといけませんね」

加藤「そういうことだ」

加藤は三人を見ながら、

加藤「何かいい案はないか？」

村上「ネットで流行っているものは、あらかじめ出尽くしてた感がありますね。帯となると単発と違って、月々金ですから。ハブニング系や動物系もお腹いっぱいな感じですよ」

下村「私もそう思います。お店紹介とか食レポートでは数字はあがらない気がします」

大森「それに、その辺のリサーチ力は、動画配信者の方が上でしょね」

フィクション劇場 第四話「公人と私人」

加藤「まあ、あいつらは再生数が収入に直結するし、自分の時間を全部それに突っ込めるからな。目立てば案件ものも来るだろうし」

村上「案件が頼りだってヤツもいるって聞きますからね」

加藤「そうだ。あいつらに真っ向勝負しても勝てないだろう」

下村「そうになると、配信者とかが、あまりやらないというか、やれないようなネタでしょうか？」

加藤「そんなもんあるのか？」

下村「ウチらは、少なくともそいつらよりは芸能関係者の情報は持ってるはずです。スキャンダルとかは別ですけど。そういう情報がうまく使えれば、行けそうな気はするんですが……」

加藤「例えば？」

下村「芸能人のお家拝見とか」

加藤「ダメだな。それも昔、やってたことが

フィクション劇場 第四話「公人と私人」

あるし、今は自分で動画上げてる芸能人も多い」

下村「難しいですか…」

加藤「それに、オンエア前にVに口出ししてきたら面倒だ。宣伝とかのバスターを要求してくるかも知れないし。そういうのが視聴者に見え隠れしたら終わりだ」

大森「じゃあ、やはり素人ですか？」

加藤「素人にしても、おいしいことを言ってくれるまで聞き回らないといけないから、視聴者ウケするようなテーマを考えなきゃな。それに週1ならともかく、帯だ。取れ高の予想が付かない」

村上「それじゃ、素人に聞くネタは芸能人ネタ、というのはどうでしょうか？」

加藤「芸能人は誰にするつもりだ？ 番組のゲストとかか？」

村上「いえ、ゲストとか関係なく、芸能人の自宅周辺に住んでいる素人に、です」

加藤「住人ってことか？」

フィクション劇場 第四話「公人と私人」

村上「はい。最近は芸能人とは言え、プライベートにはうるさくなっています。ただ、周辺の住人に何か聞く分には問題ないと思います。芸能人の意外な一面が分かるかも知れませんし」

加藤「なるほどな」

村上「これなら、インタビューするダーゲツとも絞れますね」

下村「好意的なコメントだけ切り取って、持ち上げれば、出して欲しい芸能人も増えるのではないのでしょうか？ 仕込みが入るかも知れませんが」

加藤「仕込みはオレたちには関係ないしな」

大森「私も悪くないと思います」

加藤「分かった。じゃあ、とりあえずその線で行ってみるか。初っ端は誰で行く？ 最初にガツンと行かないと」

村上「俳優の羽山さんはどうでしょう？ 超有名なのにプライベートの話聞いたことがないので、視聴者も興味を持つと思

フィクション劇場 第四話「公人と私人」

ますが…」

加藤「バカ！ あそこはアンタタッチャブルなんだよ」

村上「なぜですか？」

加藤「理由はよく知らないが、羽山さんはプライベートに踏み込むことを極端に嫌う。

今は大河の主役をやってるが、ココの局のドラマにも子役時代から主役級でたくさん出てもらってる。怒らせたらえらいことだ」

下村「じゃあ、ウチが直接やらなければいいのではないですか？」

加藤「何が言いたいんだ？」

下村「どこかに外注、という形ではどうでしょうか？」

加藤「うーん…。言い訳になるとは思うが、リスクが大きすぎる」

下村「とは言っても、私たちのこれからがかってるんですよ？ 多少のリスクは…」

加藤「もしものことがあったら、どうする気だ？ 取材拒否とか」

下村「そうになったら、下の責任にして、ウチが直接やった訳ではないということにすればいいのではないでしょうか？　実際、ウチは依頼しているだけなので。外注先にいき過ぎた点があったという形で」

加藤「うくん、まだリスクは残るが…、背に腹は変えられないか？」

大森「やってみる価値はあると思います」

村上「私も、そう思います」

加藤「よし、じゃあそれで行こう。タイトルは『突撃！　芸能人のご近所さん』だ。準備してくれ」

村上・下村・大森「はい！」

○輝樹の部屋（夜）

輝樹の電話になる。

京子（声）「すみません、輝樹さん。今、大丈夫？」

輝樹「京子か。大丈夫だ。収録が終わって、家にいるよ。何か急な用事なのか？　そち

フィクション劇場 第四話「公人と私人」

らからは出来るだけ掛けてこないでくれと言ってるはずだが…」

京子（声）「ええ。そうなんだけど…。今日、お昼のワイドショーを見てたら、私の家が映っていたの…」

輝樹、驚く。

輝樹「何だって!？」

京子（声）「正確には、モザイクがかかっていただけ、あれは間違いなくここだったわ」

輝樹「どこの局だ？」

京子（声）「大日本テレビよ」

輝樹は顔を歪める。

輝樹M「あいつら…」

輝樹「インタビューとかされたのか？」

京子（声）「いえ、私はされてないけど…、近所の方が何人かされてたみたいだわ」

輝樹「その方達は、何と言ってた？」

京子（声）「輝樹さんの言うとおり、ご近所付き合いはほとんどしてないから、みなさん、

フィクション劇場 第四話「公人と私人」

私の家だっことを初めて知ったみたいで。
光栄だとかおっしやっていたわ」

輝樹、激怒。

輝樹「…」

京子（声）「輝樹さん、どうかしたの？」

輝樹「京子…、今の生活を全部捨ててもいい
か？」

京子（声）「輝樹さん、何を急に…」

輝樹「理由は聞かないでくれ。捨ててもいい
か？」

京子（声）「私たちが苦しかった時に戻るって
こと？」

輝樹「ああ。いや、もっとひどくなるかも知
れない」

京子（声）「…」

輝樹「京子…」

京子（声）「輝樹さんが、そうしたいのならか
まわらないですよ。余程の覚悟なんでしょ
う？」

輝樹「…ありがとう、京子。そっちにも迷惑

がかかるだろう。京子がそう思うなら、別れてもかまわないが…」

京子（声）「何をおっしゃるんですか？ そんなことしませんよ」

輝樹「ありがとう、京子」

輝樹は電話を切る。

輝樹は、台所の小麦粉の袋を見る。

輝樹M「…オレの…演技力の見せ所だな…」

○大河ドラマ…輝樹の控え室（昼）

輝樹が座っている。

佐藤がドアをノックして入ってくる。

佐藤「どうしました？ テルさん。お話というのは」

輝樹「まあ座ってくれ」

佐藤「では、失礼します」

輝樹「佐藤くん、突然だが、オレは大河を降りることにした」

佐藤は、目を丸くして、苦笑いする。

佐藤「何を言っているんですかテルさん、冗

フィクション劇場 第四話「公人と私人」

談はやめて下さいよ。テルさんが居なければ番組が成り立たないですし、もう収録は半分以上、終わってるんですよ？」

輝樹「いや、降りる。正確には降ろされる、だな」

佐藤「そんな…、私たちがテルさんを切る訳ないじゃありませんか？」

輝樹はポケットから、折ってある白い紙を取り出し、机の上に投げる。

佐藤はそれを見る。

輝樹はソファーに寄りかかる。

輝樹「いやあ、噂には聞いてたが、その通りだったよ。スカッとして演技のキレが数段上がった気がするね」

佐藤は、ちよっとびっくり。

佐藤「また、また…。テルさん、悪い冗談はやめましょうよ」

佐藤は手を伸ばして、白い紙を取ろうとする。

輝樹「指紋が付くぞ？」

佐藤は手を止めて、輝樹を見る。

佐藤は声を詰まらせながら、

佐藤「こ、小麦粉かなんかでしょう？」

輝樹は自分のスマホを取り出して、机の上に置く。

テンキー画面を表示させて、ゆっくり

「1、1、0」を押す。

スピーカーモードにする。

佐藤は凝視して、息を呑む。

コール音になる。

「ガチャ」と電話がとられる。

警察（声）「もしもし、警察です。事件ですが、事故ですか？」

輝樹「もしもし、警察ですか？ 私は俳優の

羽山輝樹と…」

佐藤「わあ〜！」

佐藤が電話をかつさって立ち上がった電話に出る。

佐藤「すみません！ 番号を間違えました。失礼します！」

フィクション劇場 第四話「公人と私人」

佐藤は、ハアハア息をついて、輝樹を見る。

輝樹「佐藤くん、私から一つお願いがある。聞いてくれれば、これは君と私だけの事になる」

佐藤「な、何をすればいいのですか？」

× × ×

佐藤「そ、それは…、無理です。ウチだけでも難しいのに、民放も、というのは…」

輝樹「いや、全部だ。表沙汰になれば、オンエアしている番組、配信している過去の番組は全て休止、パッケージも販売停止だ。大河だけでも3つ4つ出てるからな」

佐藤「し、しかし…」

輝樹「民放の人気シリーズにも子役時代から満遍なく出てる。オレがばらせば、JBAは知ってて隠してたのかって話しになる。それでもいいんなら、構わないが？」

佐藤「…わ、分かりました。上に掛け合っ
てなんとかします」

輝樹「なんとかかしますじゃない。やるんだ」

輝樹「君の総合プロデューサーとしての腕に期待しているよ。これはトイレにでも流しておくから」

佐藤「このトイレで流さないで下さいよー」

輝樹「…分かってるよ」

○輝樹の自宅（その日…夜）

輝樹がトイレに紙を流す。

輝樹M「…企画会議は終了だ。後は、キャストイングだが…、ロクな役者は出てこないだろうな…」

○アルプステレビ（報道フロア）（昼）

机に座っている報道局長の山口弘、机に前には、制作局長の平井武、コンテンツ部部長の藤川誠が立っている。

山口「何だって!? オレにJBAの討論会に出ろって言うのか? 冗談も休み休み言え。それに君たちがこのフロアに入ってくるこ

フィクション劇場 第四話「公人と私人」

と自体問題なんだぞ」

平井「それはよく分かっています、山口さん。でも、これは局にとって大問題なんです」

山口「俳優の羽山がらみ、としか分からないのに、なぜ私が出なきゃならんのだ。そういうのはそっちの仕事だろう？ JBAは何を考えているんだ」

平井「おっしゃる通りなのですが、JBAからは報道の責任者に出て欲しいとの脅しに近い要望がありました。それに出ないとなると、編成にとって大打撃なんです」

藤川「そうなんです、山口さん。これも詳しいことは言えないのですが、出なかった場合は、コンテンツ部としても大幅な減収は避けられないんです」

山口「何を言われようと、オレは断固として出ない。この討論会のテーマの『公人と私人』の問題は、一言で片付けられるような簡単なものじゃない。それにオレが出れば局の総意と受け止められかねない。断る」

フィクション劇場 第四話「公人と私人」

平井「：それでは、キャップかデスクにお願いできませんか？」

山口「それも同じことだ。無理だ」

藤川「：では、他の記者の方ではどうでしょうか？」

山口「それも変わらない」

平井「：どうしても、ご協力頂けないということですか？」

山口「そういうことだ」

2人とも、キsher。

平井「：分かりました。仕方ないですね。：
でしたら、この件に関する局全体の損失は、
報道に負ってもらいますから。支局の2つ、
3つは飛びますよ？」

山口「おい！　ウチの報道体制を壊そうって
いうのか？」

平井「支局が飛んでも、そちらの数字は下が
らないでしょう？」

藤川「平井さんのいう通りです。儲けている
訳ではないでしょうから」

山口「そういう言い方はないだろう？ 君たちも知っているように、報道は使命を持ってやっているんだ。金の問題じゃない」

平井「使命とおっしゃるのでしたら、同時に責任も負って下さい。なぜ出ることが出来ないかという説明責任を。他局が出てるのに、ウチだけ出てなかったら、どういう説明をするつもりなのですか？ 逃げてると思われるだけじゃですか？」

藤川「そうです。この『公人と私人』の件は、局全体の姿勢が問われているんですよ。報道を前提としない、基本的に公益性を有していない私人に、報道としてお金を使うことが許されるのですか？ それをはっきりして欲しいということなんですよ」

平井「きちんと報道ができるのも、お金があるってことでしょう？ お金に関する説明責任は、いつも国会議員に追及してるじゃありませんか？」

山口「あれは、国民の税金だからだ」

フィクション劇場 第四話「公人と私人」

平井「でしたら、会社のお金は私たちが稼い
だお金ですから、モノを言う権利はあるは
ずですよね？」

山口「：」

藤川「：何でしたら、この話、上にあげます
が：？」

山口「：」

山口は、椅子に寄りかかる。

山口「分かった。ベテランの記者を出す。た
だし、あくまで、その討論会の取材という
形にしてくれ。それ以上は譲れない」

平井「分かりました。こちらとしても不満は
ありますが、仕方ないですね。それで相談
してみます」

山口「相談？」

平井「はい。足並みは揃えておかないといけ
ませんので」

○ J B A 討論会（午前中）

N H K の日曜討論会のレイアウト。

フィクション劇場 第四話「公人と私人」

お誕生日席には、司会の牛山加奈子と
JBA報道局次長の高橋修二。

司会から見て、右に、SBS首都圏テレビの多良伴内、毎朝テレビの植村直之。
司会から見て、左に、アルプステレビの
長谷川義輝、大日本テレビの三上さおり、

牛山「みなさま、おはようございます。日曜
討論の時間です。今日は、報道の根幹に関
わるテーマの一つであります『公人と私人
に対する取材のあり方』について、特別に
民放各局の報道部門の記者のみなさんにお
越し頂き、議論して行きたいと思います」

以下、呼ばれたら軽くお辞儀をする。

牛山「ご参加頂いているのは、アルプステレ
ビの長谷川さん、SBSテレビの多良さん、
大日本テレビの三上さん、毎朝テレビの植
村さん、そして、JBA報道局次長の高橋
です」

牛山「そして、今回オブザーバーとして、俳

フィクション劇場 第四話「公人と私人」

優の羽山輝樹さんにもお越しいただいております」

輝樹が向正面に歩いてきて、座る。

四人とも、怪訝そうな顔で輝樹を見る。

牛山「ではみなさま、よろしくお願い致します」

全員、礼。

牛山「今回のテーマですが、議論に先立ちまして、まずJBA報道局次長の高橋よりお話をさせて頂きます」

高橋「JBA報道局次長の高橋でございます。みなさまご承知の通り、私どもJBAは公共放送であり、視聴者のみなさまからの受信料で成り立っております。私どもはその名の通り、公共に資する番組作りをしなければなりません。ですので、公人と私人の取材については、局内で十分議論して慎重に行なっております。もちろん取材対象の方にも、当方の取材意図や番組構成などを細かくご説明し、ご理解を頂いた上で、取

フィクション劇場 第四話「公人と私人」

材をしております」

牛山「では次に、アルプステレビの長谷川さん、お願い致します」

長谷川「長谷川でございます。まず、私個人の意見として申し上げますが、国民の選挙で選ばれた国会議員や、都道府県知事、各自治体の首長さんや議員の方が公人であることは、みなさん異論のないところだと思います」

出席者が頷く。

長谷川「また、政府の意思決定の中核にいる方、例えば、事務次官や財務官なども、その動静が社会的に与える影響が大きい訳ですから、そう捉えてもいいかと思えます。

日銀総裁もそれに当たるでしょう」

長谷川「ただ、メディアに関わるみなさん、特にアナウンサーなどについては、露出があり、その発言に一定の影響力はあるものの、あくまで民間のテレビ局の局員、または、その局と契約をしている方々ですから、

フィクション劇場 第四話「公人と私人」

その周辺、つまり局員や契約している方の家族のみなさんも含めて、一概に公人とみなすのは短絡的で、取材の対象と考えるのは難しいのではないかと思います」

牛山「ありがとうございます。それでは、SBSテレビの多良さん、お願い致します」

多良「多良でございます。私も同じく、一人の考えとして申し上げますが、テレビ局は公共の電波を利用させて頂いているのは確かでございます。ですが、あくまで民間の会社ですので、私も、先ほどの長谷川さんのご意見に近いです。」

多良「ただ、民間の方でも、以前は経団連の会長にSPが付いていた期間もありましたので、線引きが難しいことは確かです」

多良「後は、宗教団体も公人ではないものの、社会的な影響力が大きい場合もあり、公的な団体とみなして、取材の対象となる場合もあるかと思えます。もちろん、宗教の自由は憲法で保障されていますので、公人と

フィクション劇場 第四話「公人と私人」

しての取材は慎重に行う必要があると思います」

牛山「ありがとうございます。それでは、大日本テレビの三上さんお願いします」

三上「三上でございます。私もみなさんと同じく一個人の意見としてお話しますが、今までおっしゃっていた、政治や経済に関わる分野以外にもエンターテインメントの分野にも公人・私人の課題はあると考えております。芸能人やアーティスト、映画関係者、小説家や漫画家の方がそれに当たるでしょうか」

三上「芸能人の方は、積極的にご自身を売り込むために、逆に取材をして欲しいと依頼されることもあります。その場合は、取材できる、という意味で公人とみなしてもいいのではないかと思います」

三上「ただ、最近是一部の方で、顔出しNGの方もいらっしゃいます。そういう方の創作されたものを元にしたドラマなどが作ら

フィクション劇場 第四話「公人と私人」

れるような場合には、公人・私人の区別は別として、取材などに関してはご本人の意志を尊重しています」

長谷川が横から、

長谷川「そういう方にご迷惑をおかけしないことが大切ですよね」

三上「そうですね」

長谷川「三上さんのご意見に付け加えさせて頂きますと、スポーツ選手が挙げられますね。プロ野球選手などは多くの人の憧れやなりたい人物の方が多いので、公人として取材させて頂くことが多いのですが、その親族、つまり、ご家族やご両親となると線引きが難しいと思います。その選手の成長の過程で親御さんの役割は少なくありませんので。ですから、親族の方が取材に応じて頂ける場合は、そうしますが、競技に集中したい方に対して許可を取らない無理な取材ということは如何なものかと思えます。ただ、最近は卓球に代表されるようにトツ

フィクション劇場 第四話「公人と私人」

プ選手の低年齢化が進んでいますから、未成年の方に対しての取材には気をつけています。しかし、どのくらいの力量のある選手を取材するかというのは、悩ましいところですよ。選手の成長物語のような番組を作ることもありますから。もちろん対象の方には必ず許可は取っています」

牛山「ありがとうございます。それでは、毎朝テレビの植村さん、お願いします」

植村「植村です。私も、今までのみなさんと同じで申し訳ないのですが、一個人の意見として述べさせて頂きますと、他局の方と同様に私どもの局も人員が限られていますので、自分たちだけで取材できる範囲というのは限られております。その場合に頼らせて頂くのは、専門家の方やノンフィクション作家のみなさんです。憲法で言論の自由は保障されていますが、出版前に全てのノンフィクションの書籍をファクトチェックするというのは、現実的ではありません。

ですので、当然、私たちも裏付けの取材を
します。そこを怠ると誤報になってしま
いますので。そう言った作家のみなさんは、
ご自身の責任で世の中に書籍などを通じて
発信をしている方ですので、ある意味、公
人と言ってもいいのではないかと思います」

牛山「ありがとうございます。それでは、議
論に入らせて頂きます」

× × ×

議論 1 (音なし。長谷川と三上)

× × ×

議論 2 (音なし。多良と植村)

× × ×

議論 3 (音なし。牛山が長谷川を指す)

× × ×

牛山「それでは、最後に羽山さん、何かご発
言ありますでしょうか？」

全員、羽山を見る。

輝樹「まずはオブザーバーとして参加させて
頂きありがとうございます。JBAを始め

フィクション劇場 第四話「公人と私人」

とする各局の記者の方にもご参加いただいたことを感謝申し上げます、：で、お話でみなさんあれこれとおっしゃってましたが、結局、誰を公人とするか私人とするかは、あなた方が決めているんですよね？取材対象として『おいしい』と思えば、公人にしてるんでしょう？」

場が静まる。

輝樹「だって、『私たちは、この人、私人だけど取材してます』、なんて言わないでしょ？ 公人だから取材できるのではなく、取材したいから公人に行っているんですよ」

輝樹「…ま、これは私一人の意見ですが…」

場が、静まり返る。

輝樹「ところで、みなさんは今日どういう立場でここにいらしているのですか？取材する時は『テレビ局』で、意見をおっしゃる時は『一個人』なんですか？」

E
N
D

フィクション劇場 第四話「公人と私人」

(2 0 2 5 年 1 0 月 1 日 単話アップ)
(2 0 2 5 年 6 月 1 5 日 初出)